

高知の

1

Part

いごっつそろうとはちきん

高知県の中央部に位置する高知市は、坂本龍馬や板垣退助をはじめとする多くの偉人が誕生した土地。豪気でチャレンジ精神が旺盛な彼らは、時世に新風を吹き込み、近代日本の発展に貢献してきました。

太平洋と四国山脈に囲まれて、独特の文化を育んできた土佐の人々。ちょっと頑固で、言葉が荒々しいのはご愛敬。土佐人は自由と人をこよなく愛する、情の厚い人間なのです。

男性

いごっつそろう

igossou



高知の男性の代名詞「いごっつそろう」という言葉。土佐人気質の典型としてよく使われるが、語源には多くの説がある。最も有名なのが「異骨相」説。言動も異なるが、よく見れば骨相まで異なっていたという。

また他説では、東北地方で「いごっつそろう」の「いご」を「いご」から「いご」として、これが山内氏とともに土佐入りし、反骨的な土佐人の相貌が山内氏には「いごっつそろう」に見える、それがやがて「いごっつそろう」

なっただともいわれている。ほかに「いごっつ」を意味する土佐の方言「いごっつ・いごっつ」説や「いごっつ」と何らかの関係があるという説までがある。

元親や龍馬、慎太郎などの土佐を代表する人物は、自然に人を威圧し、かつ威服・畏敬させる豪傑であり、また「いごっつ」の相貌をしていることから「威豪相」「畏豪相」と表現された。

大切なのは、「いごっつそろう」は単なる頑固・一徹・負けず嫌いというだけでなく、ユーモア・大らかといった愛すべき一面も持ち合わせているのである。

女性

はちきん

hachikin



土佐の男性「いごっつそろう」に対して、土佐の女性を「はちきん」と呼んでいる。これは、極端に男勝りな女性のことを総称する言葉である。そして、「いごっつそろう」と同様、語源には多くの説がある。

明治の土佐の郷土史家・松野尾氏によると「説あり、一つは藩政時代に針屋金蔵というお調子者がいて、その名前が由来となった説。もう一つは、八綿金右衛門という剛強の馬鹿者あり、それより至って馬鹿者を「八金」と言い始めた」と

01 ぼうしパン

高知の名物パンとして、テレビや雑誌にも取り上げられる「ぼうしパン」。誕生のきっかけは一つの失敗だったとか。

昭和30年ごろのある日、メロンパンを作ろうと下準備をしていたパン職人。上に乗せるビスケット生地を切らしてしまい、仕方なく代わりにカステラ生地を使ってみると、生地が流れて広がり、麦わら帽子のようなかわいい形のパンができた。

当初は「カステラパン」という商品名で売られていたが、その独特な形から、いつしか「ぼうしパン」という名で親しまれるようになり、ついには商品名までもそう変わったのだそうである。



02 珊瑚(さんご)

江戸時代後期に日本で初めて土佐湾で発見され、その後、採取・加工は土佐の主要地場産業となった。

現在では国内だけでなく、海外にまで輸出されている。



いう説で、両説とも元々は男性にも使われる言葉であったよつである。

また他説では、漢字にすると「八金」となるところから、平均的女性を十金とすれば、二金ほど女らしさに欠けているのだから八金という説や、四人の男性と対等に渡り合えるたくましい女性だから八金という説まである。

言葉

高知の方言

hougen

土佐の方言は、四国山脈が大きな言語の壁となつて、ユニークな方言となつてゐる。

四国地方の方言は大きく分けると、阿讃予方言（徳島県、香川県、愛媛県）と土佐方言（高知県）に分類される。

阿讃予方言では、京阪方言・中国方言の影響を相当受け、一般に比較的やさしい感じを伴つ。一方土佐方言では、京阪方言の影響も受けているが、中国・九州・和歌山・東北地方とも相当の共通点があり、荒削りで男性的な言葉ぶりが特徴である。

「のうが悪い」 具合・機能が悪いこと

「あし」 わたし、わし

「おんし」 きみ、あなた

「げに」 まことに、大変に

「へんしも」 急いで、ただちに

「びちくる」 暴れる、もがく

「たっすい」 弱い、物足りない

「ごじゃんと」 徹底的に、十二分に

酒 宴

土佐流おもてなし

おきやく



shunyu



「酒の国土佐」と呼ばれるほど、酒好きが多いといわれる高知県。その昔、国司として土佐にやってきた平安時代の歌人・紀貫之も、酒を飲んで大騒ぎする土佐の人々の姿を「土佐日記」に記している。

高知県では酒宴のことを「おきやく」という。その語源は、四国八十八カ所巡りのお遍路さんをもてなした「お客」が由来といわれている。

おきやくには、おいしいお酒はもちろん、土佐の郷土料理「皿鉢料理」も登場する。皿鉢料理とは、約40センチメートルほどの大きな皿に、海・川・里の幸といたたごちそうがdeenと盛り込まれた料理で、まさに豪快な土佐人の精神そのものといえる。

さらに、自分の杯を目上の人に差し出しお酒を注ぐ「献杯」や、その杯にお酒を注ぎ返す「返杯」、酒宴を大いに盛り上げる「しばてん踊り」「可杯」「菊の花」「箸拳」などの「お座敷遊び」も、土佐で生まれた独自の文化として、現在も息づいている。

初めて会った人同士でも、世代・性別・立場を越えてみんなで大いに盛りあがる。それが、土佐流の酒宴「おきやく」である。

菊の花

人数分の杯をお盆に伏せて、その内の1つの杯に小菊の花を1個だけ隠しておく。全員で「菊の花〜菊の花〜、あけてうれい菊の花〜」と歌い、一人ずつ杯をあけてお盆を回す。当たった人は、その時点で空いている杯の数だけお酒を注いで飲まねばならない。そして、負けた（飲めるとい意味では勝ち？）人が次に菊を隠す。



しばてん踊り



相撲を取るの大好きな、カッパに似た男の子の妖怪「しばてん」。ユーモラスなほろ酔い顔を染めた「しばてん手ぬぐい」を頭からかぶり、しばてん音頭に合せて輪になって踊れば、お座敷は大いに盛り上がる。

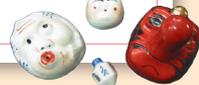
箸拳（はしけん）

二人で勝負する、威勢の良い遊び。向きあって3本ずつ箸を持ち、その何本かを片方の腕の下へ隠してじゃんけんのように突き出し、箸の数の合計を当て合う。負ければ杯を一気飲み。掛け声も勇ましく、中には見とれるほどの名人芸も。毎年10月1日の「日本酒の日」に、高知市では「土佐はし拳全日本選手権大会」が開催されている。



可杯（べくはい）

お面の形をした3つの杯は、お酒を注ぐと飲み干すまで置けない仕掛けが、赤色の「てんぐ」が最も大きく、鼻が高いので安定しない。口に穴があいた「ひよっこ」、小さい「おかめ」。歌いながらこまを回し、止まったこまの先に居た人が、出た絵の杯で飲み干さなければならない。お酒に弱い人が当たったら、すかさず誰かが助けをあげるのも、これまた一興。



03 土佐錦魚（とさきん）



高知市を中心に限られた地域で飼育されている土佐独特の金魚。琉金の体型に水平の尻尾の前側が腹部に沿って反転しており、その姿は金魚の女王と呼ばれるにふさわしく開いた扇のよう。大量生産は難しく、愛好家が伝承保存に取り組んでいる。

04 アイスクリン



高知の観光地や道端でよく売られている「アイスクリン」。砂糖・卵・脱脂粉乳・バナナ香料で作られているため、アイスクリームよりも脂肪分が少なく、さっぱりとした味。数十年前までは全国どこでも売られていたが、現在は限られた地域で見掛けることができない。最近では、イチゴ味やソーダ味などバリエーションも豊か。

05 グロリオサ

グロリオサは、和名で「アカバナキツネユリ」や「ユリグルマ」と呼ばれているユリ科の球根植物。高知市三里地区は国内有数の産地で、全国の生産量70%のシェアを誇る。ここで栽培されたグロリオサの品種「ミサトレッド」は、2002（平成14）年にオランダで開催された「インターナショナルフラワードショー」でグランプリを受賞し、世界的にもその品質が認められている。

